

衣能去垢、又漬水以管吹則泡脹起、以爲戲俗云。

〔嬉遊笑覽三書畫〕今玄やぼんとて、無患子、芋がら、烟草莖などを焼たる粉を水に漬し、竹の細き管に

其汁を蘸て吹ば、玉飛て日に映じ、五色に光りてみゆ、眞のシャボンハは、本草土部に石鹼といふも

の也、こゝにも蠻舶將來る灰色の煉ものなり、蘭人はセツプといひ、羅甸語にサポーネといふ、爰

にて玄やぼんといふなり、衣服の油を洗ふに無患子皮と白小豆を粉にして、深豆アラスヒに用ふる故に、

白小豆をシャボン豆とも呼ぶ、霸王樹も、截たる小口にて、壘などの油つきたるを摩ておとす故、

サポテンと呼たるは、ますく轉じたり、

〔締盟各國條約彙纂〕改稅約書慶應二年五月十三日、西曆千八百六十六年六月廿五日、英佛米蘭四

以テ他ヘ略シ  
テ之ヲ載セズ

第一條 各政府の臣民、皆堅く之を遵奉すべき事とせり、○中

各政府の臣民、皆堅く之を遵奉すべき事とせり、○中

運上目録 輸入品 第四種元代ニ從ヒ五分ノ

香具、石鹼。

○按ズルニ、本文ノ石鹼ハ即チ深浴ニ用キル石鹼ナリ、其所以ハ、本則中洗濯用ノモノハ、別ニ

其目ヲ掲ゲテ、本品ト區別シタレバナリ、

〔諺話浮世風呂二編〕下待やアがれ、うぬがいくら引ッこすらうとぬかしやアがつても、おらア垢おらア

摺すを落したから、うぬが垢摺おれでおれが背中を引ッこすりやアがれ、○下

〔都風俗化粧傳身下〕湯をつかふ事并にぬか袋の傳

肌肌の垢垢を去るは、紅紅の絹絹を手拭かぬか袋の上になりともあて、洗へば、垢よく落る也、

〔頭書増補訓蒙圖彙菜十蔬〕絲瓜は皮をほしてた、みをふき、踵踵のあかをとるによし、

絲瓜皮

垢摺